

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 25 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520713

研究課題名(和文) 複雑で本物の状況において学習者の英語使用を生起、内化させる協働作業の実施と評価

研究課題名(英文) Practice and evaluation of collaborative activities to make happen and internalize the EFL learners' use of English in sophisticated and authentic situations embedded with actual problems

研究代表者

保崎 則雄 (Hozaki, Norio)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：70221562

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：授業のほとんどを英語で行う授業科目「Media Production Studies」と10日間の米国海外研修などにて、実践活動を行いアンケート調査を実施した。本実践活動は、言語表現のみならず、身体的な表現といった新しい学力、ジェネリックスキルも含めて、現在大学教育において注目を集め、重要性が指摘されているコミュニケーション教育の一貫として捉えられ、その養成を図るという狙いを持って実施された。参加学生への事後評価の結果、自律性、独立性、協働作業の重要性などが指摘され、英語力の向上についての評価は、事前に取ったアンケートと事後のものを比較した結果、さほど重要視されていないという結果が出た。

研究成果の概要(英文)：In a class and a workshop of media production and acting, the participants worked individually and collaboratively by PBL(Project-Based Learning) toward actual production. The activities were conducted approximately 70% in English. The participants presented with their products in English. The end-of-course evaluation indicated that through working collaboratiely inside and outside class promoted active and independed learning as well as reflection-in-action. Also, another project of collaborative U.S. seminar camp was conducted for about 10 days and was evaluated after the students returned to Japan. The after-the-camp reflection and evaluation indicates active learning was naturally and unconsciously generated as they began to participate in collaborative activities such as giving presentations and working as Jap teaching assistants. This suggests the above activities as "mediating artifacts" in acquiring and learning English worked effectively enough in authentic situations.

研究分野：教育コミュニケーション

キーワード：英語使用 海外研修 Study abroad 協働作業 ビデオプロダクション プレゼンテーション ノンリニア編集

1. 研究開始当初の背景

英語学習に限らず、我々の学習の最大の問題点は、学校などで習う公的な学習概念(科学的概念)と日常での経験から修得された知(日常経験知)とのギャップである(田島、2010)。学校などで学ぶ英語が、旅行などで使用されている英語と異なるが故に、「通じない」「学んだ英語が役に立たない」というネガティブ概念を容易に持ちやすくなり、英語使用に自信をなくし、消極的になる。このことは、長きに渡って英語教育、学習の課題であり、英語教員はすべからずその認識を持ち、ギャップの解消に努めてはいるが、改善、解決がなかなか難しいことである。そこで、授業などで学ぶ英語に如何にして真正性(authenticity)を持たせるということが重要となる。英語を学ぶ状況の真正性の最たるものは、英語学習環境での英語使用が「実際の問題解決」に直結する事である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、英語学習の環境に真正性を持たせる試みを組み入れ、活動の前後における参加者へのアンケート、事後の面談により、その学習の変化、効果などを明らかにすることである。

3. 研究の方法

本研究は、英語を使用する4つの実践を基にその学習者の意識の変化、学びの変化、そして使用する英語の変化について分析した。それらの実践とは、

- 1) 医療系英国NPOに国際インターンとして働いた大学3年生の実践(毎週、計30回メール添付で送られてきたEssayの分析から見える学びと気づき)
- 2) 英語で行うメディア制作の授業「Media Production Studies」の実践(学期末の授業アンケートの分析から明らかになったこと)
- 3) 大学のプログラム「Language & Cultural Exchange program」の実践活動(language partnerへの期待、要望が言語習得に与える影響の分析)
- 4) 英語教員の研修プログラムの実践(活動に意味を持たせ、参加しつつ、自分の現在地を確かめ、協働作業を経由して、実践を行った)

いずれも、英語学習のために、経由するもの「Mediating artifact」を活動に取り入れるということで共通しており、言語の修得を本物の言語活動として位置づけ、真正性を含む学びの共同体において言語使用の意味付けを実践活動に埋め込み、そこから発生するもの、気づき、学びをあきらかにした。

4. 研究成果

1) について

大学生の Study Abroad で身につく力とその発生の分析

土性香那実、保崎則雄(早稲田大学)

1. はじめに

本研究で焦点を当てる Study abroad のボランティア留学とは、福祉施設や発展途上国でのボランティア活動や NPO 活動を目的として海外に留学することを指す。小林(2011)は、国際教育交換協議会(Council on International Educational Exchange, CIEE)日本代表部が提供している海外ボランティア活動には年間1,500名もの日本人大学生などが参加していると報告している。しかし、その活動期間は、夏季休暇期間や春季休暇期間などの大学生の休暇期間内で1ヶ月以内と短期間であり、半年から1年程度のボランティア活動による中長期滞在者は少ない。また、海外研修を通しての参加者の言語習得面の変化、留學生の情意面に焦点を当てた研究や、言語取得の変化とその情意面における変化を関連付けた研究は、更に数が少なく、さらにライティング力の伸びを研究したものは大変少ない(木村, 2011)。筆者が調査したところ、海外のボランティア活動に1,500名もの大学生などが参加しているにも関わらず、ボランティア活動による海外滞在中で、「参加者の語学力面の変化、留學生の情意面に焦点を当てた研究や、語学力の変化とその情意面における変化を関連付けた研究」は、さらに非常に少ないことが明らかになった。

2. 研究背景と目的

Sasaki(2011)は、若干でも海外で学んだ経験のある学生はライティング力が向上するのみならず、Motivationの面でも良い効果が継続し、また海外滞在期間が長いほど帰国後も有意にライティング力が向上した、と示唆する。海外で母国語以外の言語で生活することにより、生活言語としての役割を得、学びたいという思いが強くなり、語彙力やライティング力が向上すると推測される。また、自らの民族性についての認識が変化するであろうということも期待される。留學生は日本

を離れ、自らの民族性をほとんど意識せずにはすんでいた環境から意識せざるを得ない環境への移行、いわばマジョリティからマイノリティへの移行を経て、自分の民族性についての考えを深める可能性がある(植松, 2004). 日本国外から、日本人や日本を異なった視点から見る機会を得ることで、自らの民族性についての認識が変化すると考えられる. さらに、田中(1992a, 1992b, 1998)は、滞在国での適切な問題解決・対処手段としての対人スキル獲得が、異文化適応において重要な役割を果たすことを明らかにした. しかしながら、これらの力が身に付く過程に注目し、構造的、時系列での変化を調査した研究はあまりない.

本研究の目的は、教育機関で言語習得をするという目的でなく他国に一定期間滞在した大学生の目標言語の言語能力はどのように変化するかを明らかにすることである. 加えて、海外生活において、日々の葛藤や気付き、学び、問題解決、合意形成などの活動からどのようなことに気づき、学んだのかということをも本人が週毎に書いた英文レポートをもとに分析する.

3. 研究対象と分析方法

被調査者は、2013年8月27日よりイギリスに渡航していた首都圏の大学に在籍する大学3年生1名. 留学目的は、イギリスのNPO(医療福祉団体)での作業に従事することである. 被調査者が渡航1ヶ月後の9月25日から3月10日まで毎週ボランティアの活動や海外生活等で体験したこと、気付き、葛藤、学んだことなどをeメールで、指導教員に送ってきた英文レポートを利用した(計35枚).

本研究では、2種類の分析を行った. まず、総合的英語学力(overall language proficiency)を図る、妥当な指標として統合的複雑度を示すT-unit分析(Hunt, 1965, 1970))を用いて、各レポートの総語彙数と1T-unit(英文1文)内の平均語彙数を調べ、定量的な分析を行った. 本研究では、滞在期間と比例してどのように英語力が変化していくかを分析する指標のひとつとしてT-unit分析を用いた.

同時に、JACET8000(URL:<http://www.tcp-ip.or.jp/~shim/j8web/j8web.cgi>)を用いてレポートで使用された副詞や形容詞のレベルを判定し、滞在期間が長

くなるのに比例し使用語彙の難易度に変化が見られるかを調査した.

また、各レポートを6つのトピックに分類し、被調査者が留学中に主にどのような気付きを得て、葛藤を乗り越えたかを分析した. フォローアップとして、帰国後に、指導教員、研究者、本人の三者で、面接調査をし、レポートを書いたときのこと、書き方、心境、葛藤などについて、本人に話してもらい、同時に本研究者が疑問に思っていたことなどについて、本人の口から説明してもらった.

4. 考察

滞在期間が長くなるのに比例して総語彙数と1T-unit(英文1文)内の平均語彙数は緩やかな増加傾向にあった($t(20)=1.70, p<0.11$). また、使用語彙のレベルも回数を重ねるにつれ向上していたことが明らかになった. 被調査者は、イギリスでの福祉NPO団体での活動や日々の生活での失敗や英語力不足などから来る無力さを感じたことが明らかになったほか、外からの視点で母国の日本を客観的に分析する力や、日本の文化とイギリスで新たに触れた文化を比較して新たな学びを得た経験(筆者は「統合的文化受容」と呼ぶ)などを得たことも明らかになった. また本人が経験した事を言語化し伝えるという作業の意識性の変化が帰国後のインタビューで明らかになったことも興味深い. 滞在が一定期間をけいかけたころから、心境の変化が言語表現の変化に連動しておきていたことも興味深い. 言語習得を目的としないStudy abroadの意義について明らかになってことも今後の留学全体を考える上で重要なことであろう.

参考文献

- 木村 啓子(2011)「ライティング力の変化とその情意的要因を探る試みー海外短期語学研修参加者の場合」, 尚美学園大学
- 小林 明(2011)「日本人学生の海外留学阻害要因と今後の対策」, ウェブマガジン『留学交流』2011年5月号 Vol.2, p.10, 独立行政法人 日本学生支援機構
- Sasaki, M. (2011) Effects of varying length of study-abroad experiences on Japanese EFL students' L2 writing ability and motivation: A

longitudinal study. TESOL

Quarterly, 45(1), 81-105

植松 晃子(2004)「日本人留学生の異文化
適応の様相：滞在国の対人スキル、民
族意識、セルフコントロールに着目
して」,発達心理学研究, 2004, 第 15 卷,
第 3 号, 313-323

2) について

英語環境での映像制作活動の授業から生起
されるもの

キーワード：メディア・リテラシー 映像制
作 協働作業

学習効果を高めるためのポイント

① 主体的に学ぶことの重要性を知る

基礎的な映像表現の知識、スキルは教え
られますが、その後の活動は自分たちで
学びを深めて行くこととなります。試行
錯誤というよりも、想像力、表現力を研
ぎすませて、自分たちで方向性を決め、
メッセージを決め、映像を決めていくと
いう合意形成のプロセスが授業の中心と
なります。それは、与えられたものを正
しくこなす、答えのある問いの解を探す、
という作業とは異質な活動です。人との
協力、ツールを使用、コミュニティに自
主的、十全的に参加することによって目
標を達するという事で授業を楽しむこと
が期待されます。

② 映像表現と文字表現の違いを知る

我が国のみならず、教育では言語の占め
る部分が多くあります。試験も文字で回
答し、質問に対する答えも言語で行いま
す。一方、我々の社会は映像、画像、音
というものの伝えが多く存在し、重要
であり、それらを使用して社会活動を営
んでいます。しかしその意味、潜在性、
使用方法については系統的に学ぶ機会が
ほとんどないという現実があります。本
授業では、メッセージの表現モード（映
像、音声、文字、身体）間の自在な移動、
組み合わせをデザインし、その表現方法
と共に紹介し、実際に制作し、相互評価
をし、豊かな表現、柔らかく、より効果
的な伝え合いができるようになることを
目指します。

③ メディア消費者から制作者の視点を加え る

メディアは身近であるが故に、消費者、
視聴者の視点、価値観を離れる事、その
意味について自主的に学ぶことはなか
な困難です。制作者としての意図の具現
化を学びの活動として行うときに、両方
の視点というものを意識し、視点間で行
き来するという作業は、自主制作物のプ
レゼンテーションを行い、事後評価、デ
ィスカッションを行うことで徐々に理解
を深めることができます。本授業では、
映像・音声で描き出す、伝えるという作
業で様々な立場、視点に立つことの重要
性を考え、理解します。

④ 映像表現をベースにした「ものづくり」 をする

デジタルネイティブ世代のものづくりは、
身近な映像というメディアが適切でしょ
う。ものづくりの活動は、多くの学びの
要素を含んでいます。知識、技術、コミ
ュニケーション、機材、予算、スケジュ
ール、評価、合意形成、納期などを一定
期間で共同作業として完遂しなくてはな
りません。そこに個人がどのように参加
しているのか、ということも時間、経験
とともに変化していきます。その変化の
過程に大きな学びがあります。

⑤ 英語を使いつつ、言葉の伝えを学ぶ

この授業は英語の科目ではありません。
本授業で英語を多く使用する意図は、授
業を exportable にすること、国際化する
こと、というものです。自分独自のメッ
セージを自分の言葉で伝え合うことを学
びます。そして、作品は、クラスメート
に批評、批判され、それに対して制作者
は反論し、説明、正当化を試みます。コ
ミュニケーションの本質は突然性です。
状況、文脈の中でしか言葉は鍛えられま
せん。そのことを身を以て学ぶという活
動を経験し、学びを深めていきます。

3) について

**Analysis of Factors of Student Satisfaction in
Language and Culture Exchange program at
Japanese university**

Mizuki Eguchi, Toru Nagahama, Ako Kobayashi
and Norio Hozaki (Waseda University)

Waseda University is one of the largest private universities in Japan and has the largest population of international students on campus each year. The International Community Center (ICC) on campus provides both Japanese and international students with an educational program in which both international and Japanese students mutually benefit from participating in the educational program called the Language and Culture Exchange (LCE) Program. In the LCE, two students who speak their native languages work together in a “learning partnership” to teach and learn their native and non-native language and culture respectively. Since the beginning of the program in 2007, the program has been constantly attracting 1,000-1,500 students every year. The most recent statistical data shows that 1,071 students participated in this program in the spring semester of 2013, and that the number of participating students increased by about 20% from the previous year.

The learning process in the program, and the effectiveness of the LCE, however, has not yet been closely investigated or analyzed. This is possibly because there is no structured curriculum or learning materials in the LCE. The students have to work individually and to focus on only their own learning.

The purpose of this study is, therefore, to investigate the students’ satisfaction with the LCE Program and the factors which contribute to student satisfaction, based on the results of a MOODLE-based questionnaire conducted by the ICC. A comprehensive analysis of the 5-point Likert scale questionnaire, together with free answers revealed the following points:

1) The way to match the partners significantly affects satisfaction of the participants.

Responses to the 5-point Likert scale questionnaire showed a statistically significant correlation between the satisfaction of the entire program and that of the matching of partners (Pearson $r=0.75$, $p<.001$, $n=195$). By analyzing

the free descriptive answers in “reasons for the satisfaction of matching”, five major factors were extracted as follows: “Affability of the partner”(60%), “Common interests”(16%), “Age and gender”(10%), “Similar experience”(6%), and “Level of motivation”(4%).

ii) Approximately half of the participants reported improvement in listening and conversational ability.

The results showed that 41% of the participants answered that they improved their listening skills, and 54% reported enhancement of their conversational skills.

iii) Development of friendship played a vital role in learning of the target language and culture.

A number of comments in the questionnaire implied that by developing friendship with their partners, the participants increased the number of opportunities to use the target language, as well as to understand another culture at a deeper level.

In conclusion, the participants’ satisfaction with the LCE Program largely depends on whether participants can successfully develop mutually beneficial reciprocal relationships during the course of teaching and learning with their partners. Such an activity of “peer learning” that is generated from the reciprocal relationship can enhance students’ motivation for language acquisition and learning. In addition, peer learning could possibly promote both developing interpersonal communication skills and intercultural understanding.

4) について

TDE's power to shift teacher perspectives on communication

Suzuki, H., & Collins, P. , 2014

中等教育の英語教員を対象とした研修のプログラム設計に関する研究。グローバル社会に対応する高いコミュニケーション力を育成する教育を展開していくには、教員自身が英語をコミュニケーション・ツールとして実際にコミュニケーションを経験していることが肝要である。そこで、教員研修プログラムの目的を、コミュニケーションを展開する世界の参加者としての視点取得という点に

置き、プログラム内容を構成した。具体的には、ディベート、ドラマ・パフォーマンス、数学とのコラボによるプレゼンを通して、オーセンティックなコミュニケーションの場を多角的に体験することによって、英語話者としての自分（教員自身）の確立を目標としたことが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

- ① Suzuki, H., & Collins, P., 2014 TDE's power to shift teacher perspectives on communication, RIED 教育開発、東海大学教育開発研究所、8、45-62.

[学会発表] (計 9 件)

- ① Collins, P., & Suzuki, H., 2013, Evolving teacher perceptions on learner autonomy, ILAC Sections 5th Independent Learning Association Conference 2012, ILAC, 169-171.
- ② 長濱 澄、保崎則雄、北村 史 「口唇動作映像が英語学習者の発音習得に期待される効果」2012年8月 外国語教育メディア学会 (LET) 第 52 回全国研究大会
- ③ 山地弘起、田中東子、Gehrtz 三隅友子、保崎則雄 「教養教育におけるコミュニケーション教育の充実に向けて」 2013年3月 第 19 回大学教育研究フォーラム、京都大学 p.250-251.
- ④ 北村史、長濱 澄、保崎則雄、「協働的な活動を軸にした大学生の海外研修において養われる資質について」、外国語教育メディア学会 第 53 回全国研究大会、2013 年 8 月、文京学院大学 pp.182-183.
- ⑤ 山地弘起、橋本優花里、西田 治、Gehrtz 三隅友子、保崎則雄 「教養教育におけるコミュニケーション教育 -音表現脳科学、心理学から-」2014 年 3 月 第 20 回大学教育研究フォーラム、京都大学 p. 224-225.
- ⑥ 土性香那実、保崎則雄 「大学生の Study Abroad で身につく力とその発生の分析」外国語教育メディア学会第 54 回全国研究大会 2014 年 8 月 福岡大学 pp.80-81.
- ⑦ Hozaki, N., & Izawa, R. Analysis of an Online Course, "Fundamentals of Effective Presentation" in Terms of Students' Attitude and Messages on the Discussion Board. 12th International Conference for

Media in Education 2014. Korea University, Seoul, Korea. P.15.

- ⑧ 保崎則雄、藤城晴佳、加瀬隆史 「身体、言語というメディアの有機的なつながりによるコミュニケーション活動の促進」2014 年 10 月 第 40 回全日本教育工学研究協議会全国大会 京都 p.15.
- ⑨ 保崎則雄、長濱 澄、土性香那実、若山修也、藤城晴佳 「様々な内容、目的を持った Study abroad の広がりとそのから得られる学び、課題について」2015 年 3 月 第 21 回大学教育研究フォーラム、京都大学 p.340-341.

[図書] (計 2 件)

- ① 山地弘起 教養の「かかわり学」－共生社会へのアクティブラーニング－ ナカニシヤ出版 山地弘起編著「第二部 体験に学ぶ 第 5 章 (動きを通して)」(初稿校正中)
- ② 保崎則雄 教養の「かかわり学」－共生社会へのアクティブラーニング－ ナカニシヤ出版 山地弘起編著「第三部 メディアを識る 第 7 章 (活動理論から)」(初稿校正中)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

保崎則雄 (HOZAKI, Norio)
早稲田大学 人間科学学術院 教授
研究者番号：70221562

(2) 研究分担者

鈴木広子 (SUZUKI, Hiroko)
東海大学付属研究所 教授
研究者番号：50191789

(3) 研究分担者

山地弘起 (TAMAJI, Hiroki)
長崎大学 学内共同利用施設等 教授
研究者番号：10220360

(4) 研究分担者

北村 史 (KITAMURA, Fumito)
早稲田大学人間科学学術院 助手
研究者番号：90613860